

アメリコ・カストロのファン・ゴイティソロへの影響 —セルバンテス解釈を巡って—

本田 誠二

【論文要旨】

スペインの反体制作家ファン・ゴイティソロはフランコ体制への反発から自主的な亡命をし、晩年の半生をフランスとモロッコにおいて送った。彼は同じく内戦勃発時に亡命した歴史家アメリコ・カストロの新しい歴史解釈である『歴史のなかのスペイン』につよい影響を受け、カストロ思想を反映させるかたちで自らの文学活動を行ってきた。カストロ思想とはスペインという国が決して一枚岩の〈スペイン性〉からなっているのではなく、レコンキスタで生まれたキリスト教・イスラム教・ユダヤ教の混在によって形成されたもので、その最高の表現がセルバンテスの『ドン・キホーテ』であった。ゴイティソロはカストロを通じて文学上の〈自己証明〉をセルバンテスに見いだした。

はじめに

去年（2017年6月4日）、86歳で亡くなった現代スペインの異端的作家の最右翼ともいべきファン・ゴイティソロは、歴史家アメリコ・カストロを師として心底から尊敬し、またそのことを公言している。ともにカトリック・スペインの公的イデオロギーを辛辣に批判し、いわゆる〈スペインの神話〉を破壊することで、伝統主義に立脚する保守的スペイン人から厭われ、遠ざけられ、その結果予測される政治的迫害を避けて、異境の地において人生の大部分を過ごさざるを得なかった亡命者でもあった。両者の思想的親和性の根源には、「スペイン人をどう捉えるべきか」という共通の問題意識が存在した。それはスペイン内戦という時代の悲劇そのものがもたらした結果であり、アウトサイダーとしてスペインの外からスペイン人を凝視したときに生まれた、彼らなりの愛国心の現れでもあった。二人に共通するマージナル性（周縁性）は、〈偉大なる〉スペインの象徴であるセルバンテスとも共通している。セルバンテスが当時のスペインにおける異端的なエラスムス主義者であったこと、そして血統的ハンディを負った心理的亡命者（新キリスト教徒）であったことを初めて明らかにしてくれたのがアメリコ・カストロであった。カストロはスペイン史解釈を根本的に改めただけではなく、新しいセルバンテス像を提示して文学史をも大きく塗り替えた〈革命家〉であった。スペイン史を塗り替えるきっかけを与えたのが主著たる『歴史のなかのスペイン』（後の『スペインの歴史的現実』）であったとすると、セルバンテス像をトータルに改新させるきっかけとなったのが『セルバンテスの思想』および『セルバンテスとスペイン生粋主義』であった。ゴイティソロのセルバンテスに対する見方もまた、カストロの提示した新たな歴史と文学の解釈の上に立ってはじめて理解されるのである。

カストローアルボルノス歴史論争

現代スペイン最大の知識人のひとり歴史家アメリコ・カストロ（Américo

Castro 1885~1972) は、スペインの第二共和制時代 (1931~1936) に共和派に属し、共和国政府から駐ドイツ・スペイン大使に任命されていたこともあり、スペイン内戦 (1936~1939) が勃発した 1936 年に、(ラジオで自分が銃殺されたという報道を耳にして) 自らの身に危険が迫っていることをいち早く察知して、身の安全を図るべくアルゼンチンに渡り、その後まもなくしてアメリカに亡命した。そしていくつかのアメリカの大学 (ウィスコンシン大学、テキサス大学等) で教鞭をとり、1948 年、アルゼンチンで大著『歴史のなかのスペイン—キリスト教徒、モーロ人およびユダヤ人』(*España en su historia -Cristianos, moros y judíos*, 1948, Losada) を著わした。そして 1953 年には数多くの優れた業績が評価されて、プリンストン大学で名誉教授の称号を授与された。翌年 (1954) には、その大著は名称および内容をかなり大きく改めて『スペインの歴史的現実』(*La Realidad histórica de España*, Porrúa, México, 1954) として世に出た。

この書は後に同じくアルゼンチンに亡命し (1940.12.3)、その地で 40 年余りを過ごした C. サンチェス・アルボルノス (Claudio Sánchez Albornoz 1893-1984) との間に、スペインの起源を巡っての歴史論争を巻き起こすこととなる。これは 21 世紀の今日に至るまで、あらゆる国のスペイン史研究者にとって無視できない、懸案の未解決問題として尾を引いている。スペイン中世史の泰斗として名高いサンチェス・アルボルノスは、カストロのかつての友人であったが、評判になったカストロの著書に刺激を受け、時を移さず浩瀚な『歴史の謎—スペイン』(*España - enigma histórico*, 1956, Barcelona) をもって、それに対し激しく反論した。この二巻本の大著はまさにカストロの前著に対する批判のためだけに書かれたといってもいいくらい、最初から最後までがカストロ批判の書である。アルボルノスは立て続けに、『歴史のまえのスペイン人』(*Españoles ante la historia*, 1958) を、カストロの向こうを張るかのように、同じアルゼンチンのロサーダ社から出版し、カストロが主張するスペイン文化、ないしはスペイン性に対する根本的なイスラム的影響を否定した。彼によるとカストロが『歴史のなかのスペイン』の

中で、フアン・ルイスの『良き愛の書』に、アラブ人イブン・ハズム (Ibn Hazm, 994~1063) の『鳩の頸飾り』の強い影響を見て取ったのは見当違いで、『良き愛の書』はキリスト教とイスラム教の共存関係 (symbiosis) から生まれたわけではなく、『鳩の頸飾り』は完全にスペイン化されたものであったと述べている (pp.47-74)。ことほど左様にアルボルノスはスペイン史・スペイン文化におけるアラビア的影響を過小評価し、本質的なのは「古くからのイベリアの定数 una vieja constante ibérica (p.53) であり、イブン・ハズムとても「土と血で培われた〈ホモ・ヒスパヌス〉の上において、我らの独特な歴史が生みだした悪い果実」(p.56) だとした。アルボルノスは古代から現代に至るスペインの歴史の一貫性を主張し、〈ホモ・ヒスパヌス〉 (homo hispanus) つまり〈原スペイン人〉の形成のプロセスは未だ終わっておらず、イベリア半島の住人は、前史時代から現代まで、途切れることなく存続する永遠の存在だという見方をとったのである (*El drama de la formación de España y los españoles*, 1973, Barcelona, pp.33-35)。

こうした愛国主義的で、最初からバイアスのかかったアルボルノスの史観に対し、アメリコ・カストロは全く別の視点を提示した。それはレコンキスタを真のスペイン人形成の契機として重視し、文学と歴史という二つの側面から、スペイン史を実証的かつ言語学的 (文献学的) にとらえ直すものであった。二人の視点は全く対極的であり、水と油のごとく論点が異なっていたために議論はかみ合わず、感情的対立はエスカレートし、あまつさえアルボルノスはカストロを〈エッセイスト〉 (*op.cit.p.40*)、〈エセ歴史家〉 (p.74)、〈ユダヤ人〉 (p.105) と呼んで罵倒し、人格攻撃に終始するなどして、きわめて後味の悪い印象を残したまま、決定的な結論を見ずに終わった。しかしカタルーニャの独立問題に揺れる今日のスペインの民族共存 (convivencia) の問題に照らして見てみれば、その根源には〈ホモ・ヒスパヌス〉として一括りにできない、〈スペイン人〉が抱える本源的な異質性 (heterogeneidad) の問題が見え隠れしている。そこからもスペイン中世をイスラムとの共存・対立関係としてとらえ、レコンキスタを期にスペイン人

としての自覚が生まれたとするカストロの見方の正しさが、改めて再認識されていると言ってもいい。歴史におけるイスラム的要素の徹底的な排除と、その存在をできるだけ過小評価しようとする、従来のイスラム・フォビア的なスペイン主義（スペイン人とはカトリックでスペイン語を話す人間でなければならないとする、偏狭なカスティーリャ至上主義）とは相反するのがカストロの歴史観であり、スペイン史におけるイスラム・ユダヤ的価値の積極的評価と、それに付随する異端的言説ゆえに、スペインからやむなく亡命を余儀なくされたわけである。カストロは現代において、まさに異端審問の糾弾から身を遠ざけてイタリア（ナポリ）に亡命したフアン・デ・パルデスやフランドル、今のベルギー（ブリュージュ）に亡命したルイス・ビーベスなど、16世紀のエラスムス主義者たちと同じ立場にあったと言っても過言ではない。今日、〈聖戦〉としてのレコンキスタを認めるにしろ、否定するにせよ、イスラムの存在を無視してスペイン史を解釈することが不可能であることは、アルボルノス派、カストロ派を問わず、共通認識として定着している。かつてオルテガは「アラビア人はわが国民性の形成の中で本質的構成要素ではない」（『無脊椎のスペイン』、訳書『オルテガ著作集』2、p.339）と述べたが、その指摘は今日ではもはや通用しない。

A・カストロの歴史観

アメリコ・カストロの歴史観によると、〈スペイン人〉という存在はイベリア半島に元からあった存在ではなく、13世紀の早い時期に対イスラム戦争（1212年のラス・ナバス・デ・トロサの戦い）においてアルモアデ（almohades）に勝利したキリスト教徒たちが、王国の違い（カスティーリャ、アラゴン、ナバーラ）を超えて、共通してスペイン人たる自覚をもつようになった時期に生まれている。つまりこのレコンキスタにおける天下分け目の戦いとも言うべき戦争で、カスティーリャのアルフォンソ8世麾下のキリスト教徒たちは、イスラムの侵略をラス・ナバス・デ・トロサ（ハエン）において阻止することによって、キリスト教

徒によるレコンキスタの勝利という趨勢を決定づけたのである。その後、フェルナンド3世（聖王）による主要なアンダルシア諸都市の奪還（コルドバ1236年、セビーリヤ1248年、ハエン1246年）によって、イスラムの支配する土地は残すところグラナダのみとなった。対イスラム戦争の実質的終結によってイベリア半島北部に平和がもたらされ、外国人（南仏人）が頻繁にサンティアゴ巡礼の旅でやってきたこの頃に、他者からそう呼ばれて自らを〈スペイン人〉と称すようになった人々が出現したのであって、彼らこそが本当の〈スペイン人〉であった。間違ってもアルボルノスが言うような、イベリア半島に何千年も昔から住んできた人々（イベリア人、ケルト人、ローマ人、ゲルマン人）のことではなかった。たとえコルドバ生まれのセネカに、イブン・ハズムやセルバンテスと似たようなスペインの性質があろうとも (*España : un enigma histórico*, I, p.127)、彼らを一緒にくたにして〈スペイン人〉とすることはできない相談なのである。セネカはあくまでもローマ人であってスペイン人ではない。つまり永遠の人類学的・民族学的な存在たる〈ホモ・ヒスパヌス〉などというのは、実体のない空想的存在であり、対イスラム的な結束によって後世に生まれた歴史的存在こそが〈スペイン人〉だからである。その根拠としてカストロが指摘するのが、〈エスパニョール〉という語である。この言葉が歴史上はじめて文献上に出現したのは、ゴンサロ・デ・ベルセオ (Gonzalo de Berceo, 1190~1264?) が、1230年頃に著わした詩作品『聖ミリアンの生涯』 (*La vida de San Millán de Cogolla*) においてであった (‘padrón de españoles’ 431)。この語は聖ヤコブ (サンティアゴ) 巡礼でスペインを訪れてきた多くのフランス人 (南仏プロヴァンスの人々) が当地の人々のことを呼んだ呼び名 *espanhols* (スペイン人) が変化して *español* となったもので、本来のスペイン語ではなく、南仏由来の外来語であった (『外来語としての〈エスパニョール〉—理由と根拠』 Américo Castro, “*Español*”, *palabra extranjera, razón y motivos*, 1970, Madrid, 『スペイン人とは誰か』、訳書、p.65)。カストロによれば、キリスト教徒のレコンキスタにおける戦闘の精神的支えとして、イスラム教徒のマホ

メットに対応する存在としてあったのが聖ヤコブ（サンティアゴ）であったが（Américo Castro, *Santiago de España*, 1958）、ベルセオはその聖ヤコブのことを“padrón de españoles”（スペイン人の守護聖人）と称したのである。ベルセオの生地リオハはレコンキスタも終わり（1054）、クリュニー派（フランス・ベネディクト派）のいわゆる《フランスの道》の巡礼路にある主要都市として、多くのフランス人巡礼者がそこを通ったため、詩人は彼らの言葉を通して *español* という言葉を用いたと考えられる。因みにベルセオ以前の作品『わがシッドの歌』（1140~1207）では、未だに *español* という言葉は一度として使われておらず、カスティージャ人、アラゴン人、ナバラ人といった王国名が用いられているだけで、彼ら全体を指す場合は、イスラム教徒に対決する〈キリスト教徒〉*cristiano* という共通の名称が用いられていただけである。エル・シッド（ロドリゴ・ディアス・デ・ビバル）がアルフォンソ 6 世のもとでモーロ人のバレンシアを陥落（1094）させてレコンキスタの英雄となったのは、ベルセオの 130 年も前のことで、アル・アンダルス（当時 *Spania* と呼ばれた）はいまだにイスラム支配下にあった。したがってグラナダを除くほぼスペイン全土がキリスト教徒の手に戻った 13 世紀前半まで、〈スペイン人〉という共通分母によってくくられる人間集団は出現していなかったということになる。となると『わがシッドの歌』はカスティージャの英雄を歌った国民的叙事詩ではあっても、〈スペイン人〉のそれとは言いがたい。なぜならば国としてのスペインはあっても、実体としての〈スペイン人〉は未だに存在していなかったからである。カストロはその点に触れて、「〈エスパーニャ〉と〈エスパニョール〉には一千年の隔りがある」としている（『外来語としての〈エスパニョール〉』、訳書『スペイン人とは誰か』pp.97-114）。（因みにアルボルノスはエスパーニャとエスパニョールとを同一視している）。カストロは歴史というものを、アルボルノスが主張するようにすでに道筋ができあがった、不変で固定的な先験的性格の存在（‘lo hispano esencial’, ‘herencia temperamental hispánica’, Albornoz, *Enigma*, I.,p.128）としてではなく、

日々、そこに生きる人々が自らの運命を取捨選択しつつ、形成していくべき動的な存在と考えたのである。カストロが提示している概念である〈生の住処〉(morada vital) と〈生き様〉(vividura) とはこうした文脈で理解されねばならない。前者は必ずしも物理的空間を指すだけではなく、スペイン人が自らをスペイン人と認識するべきクロトポス(時空間)を示し、後者はその実際の働き方、機能、様式を指している。固定的で不変の気質・国民性(idiosincrasia)とは異質な、こうした大胆で斬新な仮説に共鳴したのがファン・ゴイティソロであった。

ファン・ゴイティソロとアメリコ・カストロ

第二共和制の発足した年に、バルセローナに生まれたカタルーニャ人ファン・ゴイティソロ(Juan Goytisolo, 1931~2015)は、フランコ軍によるバルセローナ爆撃によって母親を失ってからというもの、戦後のフランコ体制に対する憎しみからスペインを去り、フランスへ亡命し、後にモロッコに移住し、死ぬまでスペインに戻る事のなかった反体制作家である。ゴイティソロとカストロとの関係を如実に示すものとしては、1968~72年までに交わされたカストロのゴイティソロ宛ての28通の書簡(以下『書簡集』と称する)がある(*El Epistolario [1968-1972] Cartas de Américo Castro a Juan Goytisolo*, Pre-Textos, Valencia, 1997)。カストロは16世紀の文人A・ゲバラの『親愛書簡集』(*Epístolas familiares*)を彷彿させるごく個人的な私信のなかで、弟子であるゴイティソロに対して、心から打ち解けた調子で語っていて、われわれはカストロの肉声をそこに直に聞くことができる。カストロの歴史書がアルボルノスをはじめマルクス主義者やアナール学派から手ひどく批判されているなかで、ゴイティソロはカストロのスペイン史の脱神話化の営みを高く評価し、カストロもまたそのことをたいそう喜び、若き作家ゴイティソロを自らの力強い同志とみなした。そのきっかけはゴイティソロが1969年に、フランクフルトにおいてドイツ語で出版した『スペインとスペイン

人』(*Spanien und die Spanier*; Lucerna y Frankfurt, Verlag C. Bucher, 1969) であった。彼はカストロの史観と合致するかたちで自らの見解を明らかにし、カストロ派の旗幟を闡明にしたのである。具体的に言えば、イスラム的な価値に傾いていたゴイティソロは、カストロが中世スペインにおける本質的性質として示した、アラブ的なるものとスペイン的なるものとの共存(ムデハリスモ)、つまりフアン・ルイスの『良き愛の書』に見られるような、スペイン・キリスト教文学におけるイスラム的・ユダヤ的なるものの存在を高く評価したのである(「こうした我が国に対する歴史的解釈[サンチェス・アルボルノスがスペイン人を永遠なる実体としてのホモ・ヒスパヌスとして解釈したことを指す]は、真実とあまりにもかけ離れている。アメリカ・カストロがいみじくも指摘したように、イベリア人、ケルト人、西ゴート人は一度としてスペイン人であったことはない。もしそれを言うなら、十世紀以降、キリスト教徒との密接な共存関係の中で、独特のスペイン文化を育んだイスラム教徒やユダヤ人たちこそ、そうしたスペイン人であった」訳書、p.41)。言ってみれば、ゴイティソロの『スペインとスペイン人』はカストロの『歴史のなかのスペイン』を、21年後に自らの文学的視点(新にキリスト教の反エロス性とイスラム的官能性の対照を加えた)に基づいて、別のかたちで書き直したものと言ってもよからう。ともにフランコ独裁下のスペイン(カスティール)では禁書として出版できなかったため、後者はアルゼンチン(後にはメキシコ)において、前者はドイツ(後にはスペイン・バルセローナ)において刊行せざるをえなかった。ともに亡命先で手を取り合ったわけで、二人の間の書簡で交わされた親密な関係も、そうした思想的・政治的な立場の共通性によるものであった。

ゴイティソロは『書簡集』の序「歴史的想像力」(*La imaginación histórica, la primera página de El PAÍS*, edición Europa, del 23 de enero)において、こう述べている。

—カストロはその創造的営みのなかで、歴史学的方法を「博学的厳格さ(rigor

erudito)」と「歴史的想像力 (imaginación histórica)」をうまく合体させることで、長年、スペイン〈部族〉tribu が一致して守ってきた「古めかしい、空虚な」価値体系に対して「健全な不敬的態度」でもって臨み、多様な文化的領域への癒やしがたい好奇心を喚起し、われわれスペイン人の間で、「明察と誠実と勇氣」のごくまれに見る模範を示した。あまつさえ、われわれの神話や仮想的本質という〈風車〉に突っかかっていくカストロのドン・キホーテの熱意や、伝統的歴史学の捏造や虚偽性への糾弾は、決定的に、われわれ自身の実像を見据えさせ、われわれを中心から外縁に置き、独り立ちさせる助けとなっている (p.11) (….) カストロはスペインの硬直化と不動性の原因である、不毛で純粹主義的な孤立性に対し、〈セルバンテスの精神〉espiritualidad cervantina にどっぷり浸った、複数的で流動的なスペインを対置した一。(p.12) (傍点筆者)

こうした言説から言えるのは、ゴイティソロがカストロの歴史的視点から学んだものは、セルバンテスの批評の方法、ないしは文学におけるセルバンテスの方法であったということである。因みに『スペインとスペイン人』(ドイツ語版 1969、スペイン語版 1979)には「ドン・キホーテ、ドン・フアン、そしてセレストティーナ」という章がある(訳書、pp.87-96)。これら「後世のスペイン人の象徴や仮面となる神話」ともいうべき三人のキャラクターは、その各々がピカレスク小説のアンチ・ヒーローとともに、「スペインにおけるキリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒の、長年にわたる共存関係の文学的表現」(訳書、p.95)であった。そしてとりわけセルバンテスは『ドン・キホーテ』をもって、「多面的なアイロニーを繰り出し、作品に対する無限の解釈の可能性」(同、p.90)を生み出したのである。そしてドン・キホーテというアンチ・ヒーローは、多分に「価値観を逆転させる」(同、p.92)ピカレスク的な二重性をもっていて、サンチョという物質主義と懐疑主義の象徴とドン・キホーテという理想主義と信仰心の象徴である二人の対立は、「同じコインの両面であり、(中略)両者から生まれた関係から一連の相互的影響と関与が生まれた」(同、p.90)。

こうしたゴイティソロのセルバンテス理解が、カストロの前期の『セルバンテスの思想』(1925)や後期の『セルバンテスへ向けて』(1960)、『葛藤の時代について』(1963)、『セルバンテスとスペイン生粋主義』(1966)等を踏まえていることは明白である。ゴイティソロが旧来の価値観に対するセルバンテスの「健全な不敬的態度」(*una saludable falta de respeto*)に言及するのは、カストロが『セルバンテスの思想』において、セルバンテスはあえて正統性を誇示することで、自らのエラスムス主義(当時の異端思想)を巧みに隠蔽した《偽善者》だと指摘したからである。カストロは言う。「セルバンテスは〈巧妙な偽善者〉(*hábil hipócrita*)であって、公式的な宗教や道徳に関係することがらにおいては、最大限の留保をもって読んだり解釈しなくてはならない」(『セルバンテスの思想』訳書、p.408)「私には、セルバンテスが通常とは異なる見解や考え方をアイロニーや巧みな術で韜晦した、〈偉大な猫かぶり〉(*gran disimulador*)だった、と断定してもさほど問題とは思われない」同、pp.403-4)。セルバンテスにとって、既成の「価値観を逆転させる」ためにはアイロニーや見せかけなどの文学的手法を必要とした。なぜならばセルバンテスは「アイロニーという、批判にとって最も鋭い形式の武器」(同、p.119)をもって騎士道小説の幻想を転落せしめ『ドン・キホーテ』を生むことで近代小説を生んだからである。また、ドン・キホーテとサンチョの相関性について、カストロはこう述べていた。「人物の各々の視点というものは、ものの見方とそのさまざまな側面を表現していく。この点はセルバンテス的特質とっていいだろう。(中略)ある人物は他の人物にとっての問題として現われる」(同、p.111)。つまりドン・キホーテやサンチョのような、異なる問題意識をもった登場人物たちを描くとき、その底には他者の視点に身を置こうとする作者の姿勢があるのである。従ってゴイティソロの言う「同じコインの両面」という言葉は、そうした作者の姿勢のことを指していると解釈できる。

一方、新キリスト教徒としてのセルバンテス像を描いたカストロの後期の二著作は、キリスト教徒、モーロ人、ユダヤ人の血統的対立としてあった当時のスペ

インの社会状況を文学との関連のなかで分析している。カストロはそれらを通して、イスラムやユダヤの存在を抜きにしては『ドン・キホーテ』が全く理解できないことを教えてくれる。アロンソ・キハーノというユダヤ人改宗者（新キリスト教徒）の血を引いていると想定される人物がドン・キホーテを名乗り、旧キリスト教徒の代表である百姓のサンチョを旅の道連れにし、アルドンサという名のモロ娘をドゥルシネアという想い姫に定めて、様々な冒険の旅を行う、一見すると《滑稽譚》に見えるこの作品は、実は「アイロニーと距離感をともなって、旧キリスト教徒たちの血統意識に凝り固まったスペインを棚上げし、(中略)人間的に結びついた、血筋の差などにこだわらないスペイン人たちを、現実として、あるいは皮相と哀歎を帯びた、夢想の世界の中で描き出した」(『セルバンテスとスペイン生粋主義』、訳書、p.108)ものであった。有り体に言えば、それは三つの宗教的血統が共存したかつての〈ムデハリスモ〉のスペインを再現したものであり、「ドン・キホーテ(つまりセルバンテス)にとっての問題は、内なる道徳性・徳性であって、(血筋の問題などの)外面的配慮に関してはなかった」(同、p.141)とするカストロの判断は、ゴイティソロの全面的共感を得たはずである。

ゴイティソロの言う〈セルバンテス的精神〉とは、ドン・キホーテ的熱意の持ち主たるカストロが身をもって体現しているごとく、自らの身を物理的に外国に置き、精神的にアウトサイダーとなって、物心ともども周縁の立場に置くことによって、彼の〈風車〉たるスペイン文化のもつ神話性・本質性に対し、記述(エクリチュール)によって〈容赦ない戦い〉(「辛辣な批判」*crítica acerba*)を仕掛けるということを意味した。ゴイティソロが行った〈容赦ない戦い〉とは、二つのジャンル、つまり小説と評論を併せて行う文学活動であった。

小説ではセルバンテス流の奇想天外でアイロニーに満ちた作品(たとえば『フリアン伯の復権』『自己証明』『土地なきフアン』の三部作や『マクバラ』『戦いの後の光景』など)に結実している。また評論では、カストロ流の精緻で学問的な作品として、たとえば『スペインとスペイン人』『異論』『車掌車』『聖なるも

のに抗して』『サラセン年代記』『ブランコ・ホワイトの英語作品』『自らの巢を汚す鳥』などが、また赤裸々に自らの異端的性と文学的形成を語った独自の自伝作品として『禁猟区』や『タイファの王国』などが知られている。

ゴイティソロはスペインの旧体制のイデオロギー（血の純潔）を批判し、イギリスに亡命した十九世紀の知識人ブランコ・ホワイトという人物を、カストロ的批判精神の先駆けとして復権させ（『ブランコ・ホワイトの英語作品』）、またメキシコで客死した「スペイン語圏で最もキリスト教と遠い」（オクタビオ・パス）ホモ・セクシャル詩人、ルイス・セルヌーダの批判的精神を、自分自身に重ねるかのように高く評価している（『車掌車』）。そして『異論』（*Disidencias*）では、スペイン語文学における異端的存在として、フェルナンド・デ・ロハス、フランシスコ・デリカード、アメリカ・カストロ、カルロス・フェンテス、カブレラ・インファンテなどを挙げ、とりわけ後者二人とセルバンテスとの密接な関わりを論じている（『*Terra Nostra*」 pp.221-256, 『*Lectura cervantina de Tres Tristes Tigres*」 pp.193-219）。『サラセン年代記』（*Crónicas sarracinas*, 1982）においては、スペイン文学の大きな部分を構成するスペイン・アラブ文化の豊穡なる混交について、カストロの業績を高く評価している。この豊穡なる混交を意味する〈ムデハリスモ〉という語は、カストロが『歴史のなかのスペイン』で初めて用いた用語であり（p.414）ゴイティソロは〈ムデハリスモ〉を最も如実に反映し、スペイン文学の鍵となった作家として、フアン・ルイス、セルバンテス、ペレス・ガルドスの三人を取り上げている（*Vicisitudes del mudejarismo*: Juan Ruis, Cervantes, Galdós, pp.47-71）。彼はこの三人の各々について論じているが、アルカラ生まれの吟遊詩人フアン・ルイスについては『良き愛の書』から自らの作品『マクバラ』が生まれた経緯について語っている。ゴイティソロはこの14世紀の作品がもつ匂い立つアラブ的なエロティシズムに魅惑され、その書をマラケシュの公共広場（シェマー・エル・フナ）において読む中で始めた素描や注釈を、小さい『良き愛の書』のコンテクストに転換してしまったと述べている。それが小説であり詩でも

ある『マクバラ』そのものであった。ここにはカストロが『歴史からみたスペイン』で初めて指摘し『良き愛の書』におけるムデハリスモの概念が、ゴイティソロにおいて、異なる位相でもってあらたな創造を生み出したことが明らかにされている。両者に共通するのは、アルカラの広場やマラケシュの広場のもつ「混成的、雑種的、寄せ集めの、不規則的で、規範や格付けなどに背を向ける」作者の姿勢である。聖なるものと性なるものを、露骨にむすびつけたファン・ルイスが、モデルとしたのは、キリスト教徒の禁欲作家ではなく、偏にアラブ人イブン・ハズムを描いていないというカストロの指摘 (p.391) は、非キリスト教作家たるアラビスト・ゴイティソロの中で、こうしたかたちで新たな成果を得たということができる。さらにゴイティソロはセルバンテスに関して、アルジェでの捕虜生活を通して、モーロの世界やオスマントルコ世界と「複雑で強迫観念的關係」を取り結び、「イスラムへの強い思い入れ」をもつに至ったとしている。しかしだからといって、『真実』を独り占めするようなことはしなかったどころか、むしろ逆に「他者たるモリスコやトルコ人をして、一般大衆が尊重する視点とは相反するような視点を、彼らなりに披瀝させるほどに、さまざまな角度の真実をいろいろな所で提示している。セルバンテスはそのために仮面を被るという手法を用い、それを隠れ蓑にして、規範的なことからもれる例外的なことを示し、異なるもの見方や信念を対置した」としている。こうしたセルバンテス理解が全面的にカストロの『セルバンテスの思想』に沿ったものであることは明白である。ゴイティソロはさらに続けて言う「セルバンテスはアフリカの地に捕虜として生活することで、自らが戦いを挑んだ敵の中の敵ともいうべき相手との対比の中で、故国スペインに対する複雑で称賛すべき見方を洗練していった。セルバンテスは信念を保持せんとすれども恐怖心を覚え、拒絶しつつも欲求するという複雑な気持ちの去来する捕虜の問題をきっかけにして、生の混乱と無秩序を新たな文学のあり方に変容させた」。〈捕虜の問題〉をきっかけとして、新たな創造的試みを行ったセルバンテスが、ゴイティソロにとってより身近な存在であったとしたら、

それは小説世界を含む「あらゆる冒険を行った先駆者」だったからである。「彼のイスラム世界との親しい触れあいによって、作品にムデハルの側面がはっきり刻印されたとするならば、彼の体験と夢の全体を反映させた小説上の創意工夫によって、セルバンテスは《なべて人間のことは無関係ならず》という名言の最大の体現者となった」。ゴイティソロはセルバンテスのごとく自らの失敗や屈辱から自己を救い出し、より高い現実理想的なかたちで投影することを可能とする創造的試みをなすことを「セルバンテス的に振る舞う」(cervantear)と称している。「われわれ小説家は作品を書くとき、気づかぬままセルバンテス的に振る舞いをしている。つまりセルバンテスを起点として、セルバンテスを目標にして書いている。セルバンテスについて書くということは、われわれ自身について書くということだ」とまで述べている。これはカストロがセルバンテス小説(『ドン・キホーテ』)の斬新さは「人物〔ゴイティソロのコンテクストに沿って言えば〈捕虜〉〕が話したり行ったりすることにおいて、内面性がそこに伴っていることを感じさせる点にある」(『セルバンテスへ向けて』『『ドン・キホーテ』の序文について』訳書、p.322)と指摘した部分の、ゴイティソロ自身の言葉による敷衍に他ならない。ことほど左様に、ゴイティソロがカストロのセルバンテス理解を踏まえ、彼を起点にしてさらに百尺竿頭一步をすすめ、自らの小説世界を生み出していったことは明らかである。

ゴイティソロとカルロス・フェンテス

ゴイティソロが『スペインとスペイン人』をドイツ語で刊行した同じ1969年に、メキシコの作家カルロス・フェンテス(1928-2012)は『イスパノアメリカの新しい小説』(*La nueva novela hispanoamérica*, Joaquín Mortiz, México, 1969)を出版した。フェンテスは新しい小説の担い手としてコルターサルやガルシア・マルケス、カルペンティエール、バルガス・ジョサといった作家たちを挙げたが、彼らに加えて、「ガチュピン」(スペイン生まれの本国人)たるフアン・ゴイティ

ソロを含めたことを非難された。フエンテスはその理由を次のように説明して弁解している（*La Jornada Semanal, suplemento de La jornada. México, enero del 2001*）。

スペイン人もイスマノアメリカ人も言語・血筋・運命という部分でともに〈不純〉である点で共通していること、そしてユダヤ人やモーロ人がスペインから追放されたことによって、スペインが手足をもがれたしまったとすると、植民地であったイスマノアメリカは貧困化してしまったこと（つまり異質なるものを排除することで蒙った被害は相関していること）、そしてゴイティソロは作家としてフアン・ルイスがかつて行ったように「生き生きした実験的言語を取り戻そう」としている点が〈新しい小説〉と見なせる点。つまり言語をもって、旧態依然としたファシスト的時代の安寧や、かつての価値（貴族意識、名誉、聖なる情熱など）に対決するという姿勢が、フアン・ルイス（ないしはセルバンテス）と共通していたということである。つまりフエンテスの目に、ゴイティソロとは、スペインを含むイベロアメリカ社会に共通する現在の矛盾に対する、文学者的な視点においてほぼ一致していたのである。

またフエンテスは、1992年7月14日にスペインのエル・エスコリアル宮で行われた『戦いの後の光景』に関する討論で、著者のゴイティソロを前に、この小説の分析を行って、こうしたゴイティソロの文学的方法を高く評価している。二人はともに「レイシズムに対する解毒剤」としての〈混在〉という価値を称揚した。フエンテスはゴイティソロの『戦いの後の光景』（1982）が、パリの町（サントイエ地区）における異物としてイスラム教徒を排除しようとする動きを告発している点を重視し、現代の大きな社会問題である民族差別を文学によって告発している点を高く評価している。〈著者たる私〉と〈登場人物としての私〉が〈語り手〉の中で融合していて、人称代名詞（私、彼、おまえ）、語られる時間、異なる諸々の文化（イスラムとキリスト教）が交錯していて、形式上の〈混在〉（*mestizaje*）と内容上のそれとが融合している点を指摘する。語り口においてもセルバンテス流のアイロニーやユーモアが欠けていることはない。そうした雑多

なものの〈混在〉こそ、「セルバンテス化する」(cervantizar) という意味であり、それは同時に、イスラム化とユダヤ化を意味する。つまり、言い換えるとイスラムとユダヤという、追放され、迫害された存在を復権させ、新たに社会に取り込むことであった。

ゴイティソロはあるインタビュー (Una entrevista con Juan Goytisolo, realizada en París, el 4 de octubre de 1998 por Wolfram Eilenberge, Haukur Astvaldsson y Francisco Herrera) で聞き手から、フエンテスがかつてセルバンテス賞の受賞 (1987) に際し、フアン・カルロス国王夫妻の前で「自分の祖国はスペイン語である」という意味のスピーチを行ったが (“Mi patria es el idioma español” en *Tres discursos para dos aldeas*, pp.29-46, F.C.E, 1993)、あなたの文学はスペインの文学と断言していいかどうかと問われて、「言ってみれば自分の国籍はセルバンテスである」(Yo diría entonces que mi nacionalidad es cervantina) と答えている。

ゴイティソロはことほど左様に、国家の枠組みよりも、自らの価値(セルバンテス)にのみ権威を見だし、他から与えられるいかなる権威にも寄りかかろうとはしなかった。従って多くの権威ある世界的な文学賞をスペイン以外から受賞したときであっても、それをもって自らの権威付けにしようとはしなかった。そして 2008 年 11 月、初めて国家(スペイン教育省)から認められ、長年の功績を称えられて「国民文学賞」(Premio Nacional de las Letras) を授与された際の受賞スピーチでもこう語っている

「あらゆる創造者のごとく異常(anómalo como todo creador)であり、セルバンテスを国籍とする自分は、すでに 75 歳を過ぎ、何の野心もない、自分は完全な自由人であり、まがう事なく周縁に生きている。賞が名誉あるものとなるか、逆に不名誉となるか決めるのは、受賞する作家自身である」

あまつさえ 2014 年に、スペイン語文学で最も権威ある「セルバンテス賞」(Premio Cervantes) をフエンテスと同様、受賞したときですら、受賞前のイン

タヴェー（「エル・ムンド」紙）で「あなたはスペイン人ですか」と問われ、同じように「カルロス・フエンテスの蟹みで言えば、国籍はセルバンテスだ」（“Parafraseando a Carlos Fuentes, soy de nacionalidad cervantina”）と答えている。ことほど左様に、フエンテスとゴイティソロはセルバンテスを通して〈戦友〉ないしは〈刎頸の友〉として堅く結ばれ、思いをともにし、互いの文学的業績に対する賛美を惜しむことはなかった。晴れて二人してセルバンテス賞の受賞者となったこと、そしてセルバンテスの実像を明らかにしてくれたアメリコ・カストロをともに深く畏敬していたことが、そのことを象徴的かつ雄弁に物語っている。

【参考文献】

- Castro, Américo: *España en su historia -Cristianos, moros y judíos*, Losada, Buenos Aires, 1948,
- El pensamiento de Cervantes*, (1925), Noguer, Barcelona-Madrid, 1972 (『セルバンテスの思想』拙訳、法政大学出版局、2004)
- La Realidad histórica de España*, Porrúa, México, 1954,1962,1975
- Hacia Cervantes*, Taurus, Madrid, 1960, 1966 (『セルバンテスへ向けて』拙訳、水声社、2008)
- De la edad conflictiva*, Taurus, Madrid,1961,1963,1976 (『葛藤の時代について』拙訳、法政大学出版局、2009)
- Cervantes y los casticismos cervantinos*, Alfaguara, Madrid-Barcelona, 1966, 1974 (『セルバンテスとスペイン生粋主義』拙訳、法政大学出版局、2006)
- “Español”, palabra extranjera, razón y motivos*, Madrid, 1970, (『スペイン人とは誰か』拙訳、水声社、2012)
- Santiago de España*, Emecé Editores, Buenos Aires, 1958
- El Epistolario [1968-1972] Cartas de Américo Castro a Juan Goytisolo, Pre-Textos*, Valencia, 1997

- Fuentes, Carlos : *La nueva novela hispanoamericana*, Joaquín Mortiz, México, 1969.
Terra Nostra, 1972, Seix Barral, (『テラ・ノストラ』拙訳、水声社、2016)
Tres discursos para dos aldeas, F.C.E, México, 1993
- Gonzalo de Berceo, *La vida de San Millán de Cogolla*, Porrúa, México, 1976
- Goytisolo, Juan : *Spanien und die Spanier*, Lucerna y Frankfurt, Verlag C. Bucher, 1969;
España y los españoles, Editorial Lumen, Barcelona, 1979, 2002 (『スペインとスペイン人』拙訳、水声社、2015)
Señas de identidad, Seix Barral, Barcelona, 1966, 1976, 1986
Disidencias, Seix Barral, Barcelona, 1978
Crónicas sarracinas, Ruedo Ibérico, Paris, 1981
Paisajes después de la batalla (『戦いの後の光景』且敬介訳、みすず書房、1982)
Contra las sagradas formas, Barcelona, 2007
- Guevara, Fray Antonio de: *Epístolas familiares, Obras completas*, III, Biblioteca Castro, Madrid, 2004
- Ibn Hazm, *El collar de la paloma* (イブン・ハズム『鳩の頸飾り』岩波書店、黒田壽男訳、1978)
- Kundera, Milan: *Le rideau*, (『カーテン』西永良成訳、集英社、2005)
- Márquez Villanueva, Francisco, *Cervantes en letra viva*, Reverso, Barcelona, 2005
- Ortega y Gasset, *España invertebrada* (『無脊椎のスペイン』桑名一博訳『オルテガ著作集』2、白水社、1998)
- Sánchez Albornoz, Claudio: *España – enigma histórico*, 1956, Barcelona
Españoles ante la historia, Editorial Losada, 1958 :
El drama de la formación de España y los españoles, 1973, EDHASA, Barcelona,